

2025 年度全国遭難対策委員長会議 報告

遭難対策委員長 服巻辰則

2025 年 7 月 5 日（土）～ 6 日（日）に東京都の BumB 東京スポーツ文化会館にて全国遭難対策委員長会議及び研修会を開催した。コロナ禍以来、現地会場と Zoom の併用で開催しているが、今後も地方在住関係者の負担・経費軽減のため Zoom 併用を継続することになると思われる。今年も昨年に引き続き JMSCA 財政難のために、現地会場には JMSCA 遭対委員会側は常任委員のみとし、専門員は Zoom 参加とした。参加者は 36 名（会場 21 名、Zoom 15 名：一部参加を含む）であった。実会場参加者が復活しつつある一方で Zoom 参加者が減り、全体としての参加者が減っている。出席可否の返信もない地方連盟・協会も多く、地方の遭難対策委員会の機能低下あるいは JMSCA との連携がうまくいっていないのかもしれない。

事業計画について、昨年はあまり質問の出なかった地方講師派遣事業や地方連盟・協会の減遭難活動への支援に関しての質問があり、これをきっかけにこれらの制度を活用して頂きたい。

共済会の保険の解説の他、ジオグラフィカ開発者の松本圭司氏からと登山用地図アプリの解説と現在地通報や地図情報共有のツールなどの紹介をして頂いた。

共済会の保険に関しては、今年度から保険料が上昇したことの解説などがあった。共済会で取り扱う救助隊員向けの保険や地方連盟・協会の主催行事への包括保険の認知度が低く、これらへの質問が多くなった。

2 日目は、JMSCA 遭対としてこれまで地方連盟・協会向けに減遭難活動の支援を行ってきているが、そのうち大阪府及び兵庫県から取り組み内容とその成果の報告があった。特に兵庫県では道迷い件数に関して明らかな効果が認められる旨の報告があり、本件についてはまた改めて報告の機会を作る予定である。この他、福井県での取り組みの紹介も行われた。

前述の講演を踏まえてディスカッションの時間を設けた。講演の 3 府県の取り組みを中心に質疑や他地方の取り組みや工夫も紹介され活発な討論となった。特に、登山届提出促進として、地方連盟・協会がコンパスや YAMAP と連携して Web 上から容易に登山届を提出できる QR コードを掲載したポスターやチラシを活用している事例の紹介があり、参加者の興味が集中した。

ディスカッション時間や懇親会を含めて、現地での情報交換は他都道府県の取り組みを知ることができ、貴重な情報交換の場となっていると感じている。また、我々 JMSCA 遭対としても地方連盟・協会の要望や困りごと



をお聞きする場であり、頂いたご意見・ご要望は今後の事業に反映していきたいと考えている。

また、次年度の会議でもぜひ参加をご検討頂きたい。

2025 年度全国遭難対策協議会 報告

遭難対策委員長 服巻辰則

2025 年 7 月 11 日（金）文部科学省の講堂で開催された。全国山岳遭難対策協議会は、スポーツ庁、JMSCA、警察庁、消防庁、環境省、気象庁、国立登山研修所が主催して、山岳遭難の原因について研究協議し、今後の遭難対策の具体的施策に役立てるために毎年開催されている。

今年度は、警察庁からは山岳遭難実態の統計について昨年度は遭難件数が減少に転じた旨を、消防庁からは青森県弘前地区消防事務組合から担当山域での活動と AI を用いたトレーニングについて報告があった。

JMSCA 担当枠としては、JMSCA も参加している山岳安全対策ネットワーク協議会についてコンパス運営会社の今史靖氏が講演した。

登山届のコンパスは日本山岳ガイド協会が今氏が社長を務めるインフカム社と取り組んだものであるが、2022 年から JMSCA、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会が参加し、山岳四団体の共同運営となっている。講演ではこれらの歴史、コンパスの登山届機能（特に警察や消防等との連携）について解説があった。さらに熱心な登山愛好者ではない観光的・レジャー的ハイカー向けの地域別・山岳別簡易登山届システムや外国人向けの TOZAN-TODOKE についての取り組みの紹介がされた。ただ、秋田県、茨城県、大阪府、奈良県、熊本県などコンパスと自治体や警察と連携していない府県もあり、登山届を出す登山者の利便性、遭難時の警察や消防の計画書確認が困難になっている状況もまだ残っている。2022 年以降、JMSCA の遭対委員会としてもこれらの解消に取り組んでおり、これまでに岩手県、山形県、広島県での提携に繋げている。今後も提携拡大に関連団体と共に取り組んでいくが、該当府県の連盟・協会にも働きかけをお願いしたい。

午後は、静岡大学教授の村越真氏から国立登山研修

所専門調査部会の「コロナ禍以降の山岳遭難データから見る年代別特徴とその対策」についての講演、安藤真由子氏（ミウラドルフィンズ、体育学博士、登山ガイド）による「転滑落・転送防止に役立つトレーニング」に関する講演が行われ、その後にパネルディスカッションが行われた。道迷いや転・滑落などの遭難原因について、年代や地域の特性があることなどの報告がされた。特に、50歳を境とする瞬発力の低下が、登山における転滑落遭難の多くなる年代と一致していることを示し、瞬発



力を高めるトレーニングを推奨していたことが印象的であった。

最後に、新会長に就任した町田幸男会長の挨拶で閉会となった。

茨城県山岳連盟自然保護委員会のSDGsな活動

茨城県山岳連盟は22団体が構成されております。自然保護を担当する委員会の主な活動を紹介します。

1. 教育活動として自然に関する勉強会の開催

令和4年から令和6年には、

- 日本各山の植物の固有種と、世界で茨城県筑波山のみにある固有種の紹介
- 徳之島に特定外来種（シロハラカエル）が令和5年に発見されてから1年で6500匹捕獲され急速な繁殖がおこっている現状のお知らせ
- カエルが蛇ににらまれると体がすくむといわれているが、寸前まで逃げるタイミングを計っているらしいとの研究の紹介
- カエルの鳴くしくみの解説
などをテーマに学びました。

令和7年は「ヤマビル」について勉強会を実施し、

- ①ヒルの中で吸血するのはヤマビルのみであること
- ②吸血するときは80個ほどのカミソリのような歯で切り裂いて吸血する。その際、歯と歯の間からヒルジンという血液を凝固させず痛みを感じさせない物質を分泌する
- ③靴から靴下を経て足に入る。木などから降ってはこない
- ④人間が出す二酸化炭素を感じとるほか、空気の流れや地面の振動からも感じとる（100メートルくらい前から感知しているらしい）
- ⑤血を吸われないようにする方法は、ズボンの裾と靴下に隙間をつくらないこと。吸われた場合は手などで素早く吸血箇所を絞り出す

- ⑥吸血能力（吸血量）は1回に0.03ml～1.77ml（平均で0.48ml）、一生で最大8回吸血（0.48ml×8回＝3.84ml）
- ⑦寿命は平均3年、最長で5年くらい
- ⑧茨城県にはヤマビルが生息確認されてない

以上のことなどを、『子どもヤマビル研究会』ほかの資料を参考に学びました。

2. 全国一斉に行われる身近な水環境一斉調査

茨城県北部に位置する那珂川千代橋、久慈川湯の里大橋の二か所で実施しております。県北部の調査を実施しているのは茨城県山岳連盟のみです。

3. 自然保護啓発活動

環境省自然公園指導員15名、JMCA自然保護指導員25名、茨城県山岳連盟自然保護委員会19名にて、継続的積極的に活動をしています。

4. 山の清掃活動

花の百名山の高鈴山及び神峰山、日本百名山である筑波山にてコロナ禍以前まで実施しておりました。近年登山者のマナーが向上し、登山道にゴミがほぼ無くなりこの活動を休止しております。

5. 委員会、総会を年に各1回開催

当山岳連盟も、指導員の高齢化、後継者の問題などを抱えておりますが、次世代以降にも引き継いでいただくためにもSustainableな活動を行っていきたくております。

（茨城県山岳連盟自然保護委員会委員長 薄井晴男）



2019年高鈴山、神峰山清掃山行



2019年筑波山清掃山行

JMSCA 自然保護委員会 フィールド研修会 2025

2025年6月14～15日、一昨年・昨年に引き続き富士箱根伊豆国立公園の特別地域三ツ峠山にて、三ツ峠山荘オーナー中村光吉氏にご協力を頂いて、フィールド研修会を開催した。今回も山梨岳連、日本山岳会山梨支部との共同開催としたが、さらに埼玉、千葉、神奈川、東京の日本山岳会各支部の面々が参加、各地での山岳環境保護・保全活動についての情報交換をすることができた。

午前中より、三ツ峠登山口から山荘までの登山道で植物観察を行いながら先行していた山梨岳連、日本山岳会山梨支部メンバーと後発隊が山荘で合流、まずは自己紹介を兼ねて各自の山岳環境保護の活動状況や「思い」を語り合った。それぞれの団体が積極的に活動している様子を伺い知ることができたが、特にシカによる食害は目に余るものがあり、どここの団体も頭を悩ませている。また昨今、毎日のように報道されているクマの目撃情報や人的被害について、温暖化の影響でブナ等の森の木の実の不作が伝えられる中、高齢化が進む里山の管理を如何にすべきか抜本的な解決策が見いだせないままに新しい大きな課題として残った。

13時より中村オーナーにご案内頂き、希少植物の観察会。登山道脇に設置された防鹿柵の鍵を開け、アツモリソウの保護地に分け入る。山頂周辺の登山道の殆どは、しっかり施錠された防鹿柵が取り巻いている。かつては三ツ峠の峰々を彩っていた多種多様な高山植物や緑の絨毯を形作していた下草の多くは姿を消している。深刻なシカ害や残念ながら未だに盗掘も確認されており、また近年では花の撮影を目的とする人の踏み荒らしや踏み固めによる自生地の縮小も危惧され、「柵」は現状唯一の対抗措置と考えられる。

お目当てのアツモリソウはシカ柵の中の更に頑丈な鉄柵の中でしっかり護られていた。しかしながら、どの株も一昨年・昨年より小ぶりで開花した花も少なく、受粉を介在するマルハナバチが袋状の唇弁に潜り込めるか心配とのことであったが、蕾は沢山ついていて以後が楽しみな状態ではあった。昨年以来続く猛暑、また今年は雪が長く残ったことに起因するようだ。毎年同じ日程



ササ類の除草作業



満開の
ムラサキツリガネツツジ

で観察すると、そうした気づきがある。シカ対策をはじめ、アツモリソウ等稀少植物の保護活動の苦労話を伺いながら、やはり自然の営みの影響には抗えないことを強く実感した。

シカ柵を出て、次のメニューは貴重な植物の生育環境を維持するための除草作業。毎年テンニンソウの除草をしてきたが、今年はササ類。何処にでも蔓延るこれも大敵、駆逐への終わりが見えない作業ではあるが、霧雨の中、参加者全員で汗を流し予定の区画の除草を終えた。

さらにムヨウランなど登山道脇に僅かに残る稀少植物を観察しながら、三ツ峠の3つの頂を巡る。途中、令和4年度の山梨県のレッドリストデータブックには＊絶滅危惧ⅠA類(CR)にリストアップされている、ムラサキツリガネツツジが紫色の濃い釣鐘状の花を付けて迎えてくれ、参加者一同歓声を上げる場面も。またカモメランは、群生地に補強された柵が奏効したか、昨年より沢山の花を咲かせ私たちの目を楽しませてくれ、充実した観察会を終えることができた。

中村氏、三ツ峠山荘スタッフに改めて感謝申し上げます。

＊絶滅危惧ⅠA類(CR)レッドリストにおける分類のひとつで、ごく近い将来に絶滅する可能性が極めて高い種に位置づけられる。

(自然保護委員長 小高令子)

寄贈図書

兵庫山岳連盟	「兵庫山岳」第697号
Corean Alpine Club	「山」2025年6月号 Vol. 291号
朝日本運動新聞社	「スポーツ産業新報」第2474号、第2475号、第2476号
日本トレーニング指導者協会	「JATI EXPRESS」Vol.107
健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」No.567
株ネイチュアエンタープライズ	「岳人」8月号 No.938
市立大町山岳博物館	「山と博物館」2025夏号 第70巻2号
(株)山と溪谷社	「ROCK & SNOW」No.108

会報
会報
新聞
会報
会報
寄贈本
情報誌
情報誌

(公社)東京都山岳連盟	「TMF都岳連通信」2025年2号
株山と溪谷社	「山と溪谷」8月号
(公財)日本スポーツ協会	「SPORT JAPAN」vol.80
常北山水会山岳部	「山水」第51号
新潟県山岳協会	「新山協ニュース」第370号
東京野歩路会	「山嶺」Vol.102 No.1145
(公社)日本山岳会	「山」2025年(令和7年)7月号 No.962
おいらく山岳会	「山行手帖」No.788.25.8

会報
寄贈本
情報誌
会報
会報
会報
会報
会報